

元国連職員、ガザのジェノサイド犯罪では英米も共犯だと証言する

インタビューする人：クリス・ヘッジズ

インタビューされる人：クレイグ・モカイバー

翻訳：脇浜義明、補訳：田中一弘 *脚注はすべて訳注

出典：Real News Network, Chris Hedges Report, 2024年1月26日



国際司法裁判所はこのほど、ガザにおける大量虐殺の罪でイスラエルに対する予備的措置を下した。この判決は、国連がイスラエルに対して説明責任を問うことを何週間も待ち望み、何か月も国際的な反発が続いたことを受けたものだ。多くのことが未決定のままではあるが、イスラエルの虐殺を前にして国際機関が無力であることから、その整合性が危機に瀕している今、これは重要な進展である。昨年秋、パレスチナ人保護についての国連の「失敗」に抗議してその職を辞したクレイグ・モカイバー（Craig Mokhiber）元ニューヨーク人権高等弁務官事務所所長が、クリス・ヘッジズ・レポートに登場し、米国とイスラエルの不処罰に直面する国連の弱点について議論する。

クリス・ヘッジズ： 国連人権高等弁務官事務所（OHCHR）ニューヨーク事務所の所長クレイグ・モカイバーさんが昨年10月31日に、「またもや我々は眼前でジェノサイドが展開しているのを見ているが、我々が働いている国際機関は無力でそれを止めることが出来ないようだ」と言って、辞表を出しました。彼は、過去にもルワンダのツチ族虐殺、ボスニ

アのムスリム虐殺、イラクとクルディスタンにおけるヤズィーディ教徒虐殺、ミャンマーのロヒンギャ虐殺を国連は止めることが出来なかったことを指摘しています。

彼は高等弁務官宛に「我々はまたやるべきことをやっていません。現在パレスチナ人が全面的に殺害されています。これがイスラエルの自民族中心主義的・入植者植民地主義イデオロギーと、アラブ人というだけで何十年間にわたって組織的に迫害・排除してきた歴史の延長から生じていることは疑いの余地がありません」と書いた文書を提出しました。さらに、「これはまさに教科書どおりのジェノサイド」と付言し、米国、英国、そして多くのヨーロッパ諸国はジュネーブ条約が規定する義務の実行をしないばかりか、反対にイスラエルの戦争犯罪に武器を提供し、政治的・外交的にイスラエルを擁護していることも書きました。

「我々は歴史的パレスチナの地にキリスト教徒もムスリムもユダヤ教徒も平等な権利で暮らせる民主主義的な世俗国家を作るという一国解決案を支持すべきです」、「それ故、極端に人種差別的な入植者植民地主義事業の解体、アパルトヘイト体制を終わらせるべきです」とも文書の中で記しています。

モカイバーさんは国際人権法を専門とする法律家で、1992年からずっと国連で勤務してきた。彼は高等弁務官として人権主体の問題への接近法を考案する仕事を主導し、パレスチナ、アフガニスタン、スーダンで人権問題上級顧問として活動、1990年代にはガザで暮らしていました。

しかし、ジェノサイドへの無関心は例外的な現象ではなく、常態です。国際社会はアルメニア人虐殺、ホロコースト、カンボジアやルワンダやボスニアの大虐殺を止めようとほとんど動かなかった。パレスチナに関しても、毎日数百人単位でパレスチナ人を殺傷し、その上食糧、医薬品、燃料、その他の生活必需品のガザ搬入を止めているイスラエルを止めようとしないで、傍観しているだけでした。ガザの230万人口の85%までがイスラエルの攻撃でホームレスになっているのに。

イスラエルのジェノサイドを非難する声は、非常に少ないとはいえ、あったのですが、その声を上げるために生活の糧の仕事を犠牲にしています。米務省政治軍事局に11年間以上勤務していたジョシュ・ポール (Josh Paul) は、彼の手記によると、イスラエルへの兵器支援の継続に反対したために辞任へと追い込まれました。教育省の最高顧問だったタリク・ハバシュ (Tariq Habash) は、この1月に、何百万人の人々の生活破壊に手を貸す現政権のために働くことはできないとして、辞職しました。

務省や国際開発庁など政府機関の内部では政策に抗議する文書が時々提出されることはあったのですが、大量辞任という抗議行動はありませんでした。我々米国人はジェノサイドを最悪な犯罪とし、学校のカリキュラムでホロコーストを教えているのに、一体何故実際にそれが起きているのに、止めようとしないのでしょうか？ 何故立ち上がって政府や諸機関にジェノサイドを黙認したり、それに手を貸す共犯行為を行っていることを声をあげて非難・反対する人が少ないのでしょうか？ 歴史から何も学ばなかったのでしょうか？

今日は、先ほど紹介したクレイグ・モカイバーさんとガザで起きていることとジェノサイ

ドに対する無関心の歴史について話し合います。

では始めましょう。クレイグ。ジェノサイドは初めてではなく、ルワンダやボスニアでもありました。私はボスニアに居ました。何故そんなことが起きたのでしょうか。人類はホロコーストの教訓を学校や大学カリキュラムで教えてきました。それにもかかわらず、現在我々は、はっきりと、ホロコーストが進行しているのを目撃しています。あなたが辞表で書いたように、米国はそれを止めようとしただけでなく、それを実行している国に武器支援をしています。

クレイグ・モカイバー： ええ、そのとおりで、そこが違うんです、クリス。ルワンダでジェノサイドが行われていたとき、米国と英国の政府はどのような態度を取ったと思いますか。リークされた外交公電によると、両政府は外交官たちに「ジェノサイド」という言葉の使用を禁じたのです。ジェノサイドと公式に認めれば、両国が署名した国際法に基づいて、それを防止、止める、実行者を罰する行動を行う義務が生じるからです。両国政府は国際法が規定する防止義務を意図的に怠ったという罪を犯したのです。

現在のガザ・ジェノサイドに関してはもっとひどいです。米国、英国、そして幾つかの西側諸国はジェノサイドに実際に加担しているのです。それはジェノサイド条約では犯罪、共謀罪になります。ご承知のように、ガザ・ジェノサイドでは、米国は実行犯イスラエルに経済的、軍事的、諜報面、外交面で支援をしています。国連安保理では拒否権を発動して停戦案を潰しています。拒否権発動のたびにパレスチナ人の死者が何千人も増えているのです。

それだけではありません。米国は国務省、国防総省、ホワイトハウス、国家安全保障会議などの公的機関を使って、イスラエル軍の病院攻撃などの戦争犯罪を正当化するプロパガンダをばら撒いています。

米国の責任は大きいです。米国や西側諸国の過去のジェノサイドにおけるしくじりよりはるかに大きい罪です。私が大変心配しているのは、西側列強諸国が採っている態度が国連やその他の国際機関を脅して沈黙させ、墮落させることになることです。

クリス・ヘッジズ： 国際機関内部で何が起きているかを議論しましょう。前にも言ったように、私は戦争中のサラエボにいました。毎日300～400発の砲弾が飛んで来て、日に4～5人が死に、20～30人が負傷していました。しかし、現在のガザでは1日に数百人が死傷しているのです。イスラエルの絨毯爆撃はこれまで見たことがないほど残酷なものです。ボスニアと比較しても、ガザの虐殺は酷い。ガザの住宅の60～65%が破壊されています。それだけとっても戦争犯罪で、ジェノサイドであるのは間違いありません。

国連の話から始めましょう。あなたは国連で長い間働いていました。国連内部では何が起きていたのですか？ 事務総長は停戦を呼びかけましたが、国連機関全体はどうしていたのですか？¹

¹ 事務総長の停戦呼びかけは、虐殺が始まって11日目という遅い時点で行われ、しかも「人道的停戦」という言葉を使った。つまり、ガザ住民への救援物資を運ぶためだけの停戦で、運び終わったらまた虐殺をやってよろしいという言外の意味を含んでいた。

クレイグ・モカイバー： おっしゃる通りです。そのことに私は大きな衝撃を受けたのです。10月に辞表を出すときに国連に出した最後の文書で、イスラエルのジェノサイドが客観的にも明白で、イスラエル指導者たちが公然と虐殺意図を声明で表現し、実際にそれが実行されているのに、国連が「ジェノサイド」という言葉を使うのを恐れているのは、国連がよって立つ基本原理を自らの手で崩していることを示している、と書きました。

10月時点でイスラエルはそれまで数十年間行ってきた漸増的ジェノサイド戦略を捨て、イスラエルが喉から手が出るほどやりたがっていた全面的民族浄化、ヨルダン川から地中海の間の地に残っているパレスチナを最終的に撲滅させる破壊活動を迅速に行う戦略に変えました。ガザは何よりもその犠牲になっているのです。漸増的ジェノサイド戦略というのは、西側諸国からの支援を繋ぎとめるために考案されたものです。ガザ・ジェノサイドの前に、すでに2023年に西岸地区では、軍の襲撃、大量逮捕、ハワラ村ポグロム²など、村や町から住民を追い出す民族浄化が行われていました。

そういうイスラエルの犯罪行為が毎日国連に入ってきました。しかし、国連の政治部門、政治的指導者たちはただ不安がるばかりで、ほとんど黙認する有様でした。

今やイスラエルのパレスチナ民間人大量殺害が100日目になっているとき、国連の上級指導者から聞こえてくるのは、人道的援助の呼びかけとどこか遠くにある二国解決案という決まり文句だけです。換言すれば、ジェノサイドに触れない安全な言葉だけです。

しかし、この紛争の根本原因に関する発言、日々繰り返されている現実の戦争犯罪、入植植民地主義の現実、民族浄化、迫害、アパルトヘイト、占領、追放、不平等、自民族中心主義、これらパレスチナ人と歴史的パレスチナの地がこれまで経験してきたこと、そして現在ガザで進行しているジェノサイドに関する言及は、国連高官の口からは聞こえてきません。国連事務総長も他の高官もそれに触れません。

そもそもイスラエル非難をしないのです。人道的援助の声は聞こえますが、ロシアがウクライナに侵攻したときやハマスが10・7ゲリラ闘争をやったときにはあらゆる種類の形容詞を使って非難の大合唱をやったのに、イスラエルのジェノサイドに対しては無言です。理由は簡単で、大国がイスラエルを支援しているので、国連指導者は大国を恐れて沈黙するのです。

また目につくのは、国際法の具体的規定を無視して曖昧な政治的用語でぼかすことです。二国解決案という政治的用語もその一つです。つまり、イスラエルとイスラエルを支持する西側大国に国際法の具体的規定を遵守しないですむようにする策略です。

そんなことをしていたら、現実には、重要な国際機関がその任務を放棄する事態になります。例えば、国連にはジェノサイド防止事務所があるのですが、あなたは今のところ知らないでしょう。というのはジェノサイドを監視していながら彼らはずっと沈黙したままだからです。同じことが、紛争地の子どもを擁護する立場の特別顧問に関して言えます。国際刑事裁判所は国連機関ではありませんが、そこに政治的に墮落したカリム・カーンという検察官が

² 2023年2月、数百人の入植者がハワラ村などを襲って破壊活動を行った事件。

自分の任務をないがしろにして、イスラエルの戦争犯罪を告発するのを拒否しています。

2023年というのはまさに大きな皮肉の年でした。それは世界人権宣言の75周年記念の年であり、ジェノサイド条約締結の75周年記念の年でしたが、同時に南アフリカでアパルトヘイトが採用された75周年、パレスチナのナクバの75周年の年でした。この善と悪が同時に生まれたことによって、二つの基準が誕生し、それが二重基準として現在まで続いているのです。矛盾を孕んだイスラエルの植民地主義が現在まで実行されているのです。

政治の周辺部の人物でなく、大統領、首相、7人の閣僚、軍高官など中枢部の人物が公然とジェノサイドを行うと宣言し、そして実際に軍兵士たちが狂喜してジェノサイドを繰り返している現実を目前にして、それをジェノサイドと呼ぶ勇気を失ってしまっただけでは、もうジェノサイドがないことになってしまいます。ジェノサイドなんてなかったし、ないし、今後もない、ということになります。つまり、人類は最悪の犯罪から人々を守る国際的措置を失ったのです。

クリス・ヘッジズ： あなたは国連幹部が大国を怖がっていると言いました。仮にジェノサイド防止と保護の責任に関する事務所や事務総長などが立ち上がって、ジェノサイドをジェノサイドとはっきり言い、アパルトヘイト国をアパルトヘイト国とはっきり言えば、彼らに何が起きるのですか。

クレイグ・モカイバー： そんな発言をすれば、イスラエル・ロビーが活動し、大変な辛辣な非難の大嵐に見舞われます。反ユダヤ主義者、テロリスト支援者などのレッテルで激しい個人攻撃を受けます。国連指導者はそれを怖がっているのです。私も何度もそういう個人攻撃を受けました。

クリス・ヘッジズ： 発言を遮って悪いですが、イスラエル・ロビーは事務総長に対してそのようなことをしています。彼らは総長を反ユダヤ主義者と呼んで退任を要求していますね³。

クレイグ・モカイバー： ええ、ハマスの攻撃が然るべき状況の中で生じたと普通のことを言っただけで、それが間接的にイスラエルへの穏やかな批判になるので、糾弾対象となったのです。だから、実際にイスラエルが行っている犯罪を犯罪とはっきり言えば、どうなるか想像がつくでしょう。国連官僚はそれをよく知っているのです、それに応じた処世術を体得していったのです。

でも、職員は毎日仕事に追われ、イスラエル・ロビーの中傷や攻撃に抵抗して、やるべきことをやろうと忙しくしています。私が国連に勤務し始めた頃は、イスラエル・ロビー・グループの影響力はほとんどありませんでした。しかし、今日では、西側諸国の政府と同じで、国連でも親イスラエル・ロビーが強くなって、国連高官を脅して沈黙させるのに効果的な戦術を使っています。

³ グテーレス国連事務総長は、10・7ハマスの攻撃が何も無い空間に突然起きたものでなく、何十年間にわたる占領の中で起きたものと、ごく当たり前のことを言ったのに対し、イスラエル国連大使が事務総長を激しく罵倒した。

しかし同時に、大国加盟国、とりわけ米、英、EU 諸国の影響力が無視できません。彼らの国連指導部に対する圧力が絶対的なのです。人種差別と闘い、ある地域の被差別民を保護するのに必要な資金を決める予算委員会になると、これら強国は指導部が言うことを聞かなかったことを思い出して、嫌がらせをします。国連機関の通常の業務と予算委員会の間には大きな壁があります。予算委員会では事業内容よりは政治が大きな力を発揮します。

それに、国連職員は自分のキャリアを心配します。国連の一部では、特に政治力が強く働く場面では、強力な政治力を持つ国に逆らわないことが処世術、職業上の知恵となっています。国連の基準や理想を大国の神経をイラつかせるような形で語り実践しようとするれば、国際的外交世界をよく知らない素人扱いされます。

国連憲章、世界人権宣言、国連議決や条約の多くは、国連の使命を実行し虐待を受ける人々を守ることを国連の業務としているのだけれど、リアル・ポリティークの世界では、必ずしもそうなりません。その中で国連の理念にそって行動しようとするれば、孤立し、宙ぶらりんな存在になります。イスラエル、米国、親イスラエル・ロビー・グループから酷い攻撃を受けても、国連は守ってくれません。仕事を失う危険さえあります。だから、多くの国連職員が発達させた処世術はまさに効果的な職業的生き残り戦術なのです。

クリス・ヘッジズ： 米国政府内についてはどうですか。国連とは少し違うのでしょうか。もちろん、職業的処世術や出世主義については同じでしょうが。 自著『集団人間破壊の時代：平和維持活動の現実と市民の役割』（原題 *A Problem From Hell: America and the Age of Genocide*、ミネルヴァ書房、2010年）の中でホロコーストやルワンダやその他の大量虐殺のときに何もしなかった米国政治家や官僚を批判したサマンサ・パワー（Samantha Power）も、やはり、現在のガザ虐殺に関しては沈黙しています。彼女は国際開発庁（AID）長官に出世した人物です。それに、あなたが指摘したように、米国政府はイスラエルに資金や武器弾薬を援助してジェノサイドに協力しています。議会の承認なしにイスラエルに武器弾薬を売ったことが二回ありました。そういう支援を止めれば、イスラエルの蛮行が止まるとは言いませんが、かなり難しくなるはずです。米政府内ではどういうことが起きているかを話してください。

クレイグ・モカイバー： 私には政府内部の情報を得るすべがありません。私が知っているのは国連での米国の顔です。それは、国連がイスラエル批判しようとするやと厳しくなる顔です。

私の国連批判は、国連の政治的指導部の批判という形を取ります。米国の拒否権でまったく不全麻痺になっている安保理のような政府間機関や、国連事務局事務総長室の指導部や、各機関の長などの批判になります。しかし、国連で働く一般職員を批判していません。彼らはしっかりした思想で国連に奉仕しています。貧困、戦争、人権侵害、不平等を憎む人々です。毎日国連の理念に基づいて働き、世界の人権擁護運動や平和運動と連帯して活動しています。しかし、今回のガザ虐殺になると、彼らは政治的指導部から見捨てられるのです。

例えば、ガザで懸命に働いている150人以上のUNRWA 職員の批判なんかしていません

ん。この100日でイスラエルの砲撃で家族もろとも死傷した人々です。私は彼らを虐げられた地域の人々のために懸命に活動する英雄だと思っていますが、イスラエルの銃弾で命を失ったり、親イスラエル・ロビーの「テロ支援者」「ハマスのスパイ」というレッテル貼り攻撃に苦しんでいます。

米国の国連対策は鞭を振り回すことです。その鞭は予算に関する恫喝だけではありません。もっとひどいことをします・・・私がいつも言ってきたことですが、米国務省の外交官になるには外交的スキルは不要で、巨大な権力をバックにして、飴と鞭を振るうだけでよいのです。

また、鞭と飴は国連総会の投票を左右するために使われます。外国援助を必要としている発展途上国や国内に問題を抱えている弱小国家に対し、米国は飴と鞭を使って米国の希望する形で投票させるのです。国連総会での投票に対しても飴と鞭を使って、米国に都合のよい問題ではそれを支持し、都合の悪い問題では沈黙するように仕向けるのです。例えば、外国の援助を必要としていたり、政治的に困難を抱えている小さな開発途上国に対して、同じ飴と鞭が国連の中で使われています。

人権というのは、米国にとって、米国の敵をやつけるための政治的道具で、米国の同盟国や友好国が人権侵害している場合は、その責任が追及されないように、影響力を行使するのです。人権問題に関しては、米国の姿勢には大きな矛盾と皮肉があります。国際人権プログラムでは、米国政府は人権プログラムのほとんどに反対するので、異常者扱いされています。米国は経済的・社会的権利を人権として認めることに反対します。米国は発展権利に反対します。米国は死刑廃止に反対します。子どもの人権擁護の唯一の国際条約である子どもの権利条約を批准していない地球上で唯一の国です。193カ国のうち、この条約を批准していないのは米国だけです。

そして米国は国際刑事裁判所に反対し、もし自国の国民または同盟国の国民が国際刑事裁判所から告訴・逮捕されるようなことがあれば軍事行動で解放するという「ハーグ侵攻法」⁴を成立させました。

だから人権に関する米国指導部はとても「指導部」と呼べるものではありません。もし、指導部なら、たとえ暫くでも人権擁護国連原理に従ってよさそうなものだが、国連の人権関連部分にはよそよそしい態度です。

数年前、南アのユダヤ系判事のリチャード・ゴールドストーン (Richard Goldstone) を委員長とする調査団がガザの人権侵害を調査しました。リークされた極秘外交公電によれば、イスラエルと親イスラエル派は巨額の資金を投じて外交機構全体を利用して調査の妨害をし、調査結果が発表されると、それを徹底的に中傷して、デマだとか反ユダヤ主義などのレッテルでその信頼性を傷つけました。イスラエルに協力した国は米国、英国、幾つかのヨーロッパの国です。

クリス・ヘッジズ: あのゴールドストーン報告書のことを言っているのですね。ゴールド

⁴ 正式名は「国際刑事裁判所から自国民を保護する法」。

ストーン判事は勇気をもってイスラエルの戦争犯罪を調査して発表しました。しかし、結局、圧力に屈して、調査結果を自ら否定する破目に陥りました。

クレイグ・モカイバー： 強烈な圧力で彼の人生や家族を破滅させるような中傷キャンペーンでした。彼はユダヤ人で家族がイスラエルで暮らしていますが、その家族を訪れることを禁止されました。彼自身は自分も家族もシオニストだと言っています。彼が圧力に屈したことを批判する人々がいますが、その人たちは圧力の物凄さを経験したことがないから、そう言えるのです。とても堪え得ないほど悪質で危険な圧力です。公的な立場でイスラエルの残虐行為を発言すれば、たちまち親イスラエル・ロビーの怒りが爆発し、連日脅迫電話やネット中傷投稿が続きます。だから、私個人はゴールドストーン判事を批判しません。散々打たれて屈服せざるを得なかった判事に同情します。

クリス・ヘッジズ： いったいどうなるのですか。現在ジェノサイドが展開しています。イスラエルは今後数か月間飢えを武器を使ってガザを徹底的に破壊すると言っています。ガザの人々は飢えています。最新の国連報告によれば、餓死の恐れにあるパレスチナ人が50万人もいます。いったいパレスチナ人はどこへ行けばいいのですか。国際社会の介入がない場合、結果はどうなるのですか。米国が語るのは、戦争が終わった時のことばかりです。

クレイグ・モカイバー： どうなるかは、もう見えていると思います。イスラエルはジェノサイドの目的を達成したと、私は思います。事実上ガザを壊滅しました。ガザ回廊を北から南へと手際よく系統的に移動して、ほとんどの家屋、ほとんどの市民的インフラ — 病院、学校、モスク、診察所、救急車、墓地、裁判所、記念碑を破壊しました。

目的は、指導者の絶滅宣言演説を聞かなくても、明らかです。ガザの市民生活を抹消すること、生き残った人間が通常の尊厳ある人間的生活が出来なくなるようにすることです。それは15年前にガザ封鎖を始めたときから始まっていたのですが、10・7ハマス攻撃を契機に一気にジェノサイドとして促進させたのです。今やガザには生活らしきものは残っていません。あなたは「餓死」という言葉を使いましたが、まさにこの地中海沿岸の小さな土地に人為的に餓死、疫病が作り出されたのです。それは私たちがこれまで経験したことがないものであり、死者、絶滅される数は今後も増えるでしょう。

軍事攻勢はまだ続いています。今日、軍からガザ回廊の南端のラファへ移動せよとの通知がありました。ラファは数千人の人口でいっぱいになる小さな町ですが、すでにガザの人口が全部移ったかのように、もうテントで溢れかえっています。

そして今、このジェノサイドという任務を終わらせるための動きが見られます。ラファに集中させて、ラファを攻撃することで、イスラエルの軍事攻勢の目的が完了するのです。イスラエルは、永遠に続けることはできないと分かっているからこそ、その目的に向かって行動を速めているのだと思います。そして、彼らはすでにガザの破壊とガザの生活の破壊に成功していると思います。

イスラエルは戦後処理を考えているでしょう。生き残った住民がガザに戻らず、ラファからエジプトへ自発的に逃げるようにすることです。彼らがシナイ半島の砂漠のテントで死

ぬか、どこかの国でディアスポラとして暮らすかする道しかないようにすることです。それは、まさに、南アフリカによる国際司法裁判所への告訴が指摘しているように、1947年のナクバ以降シオニストが行ってきた民族浄化の最新版です。それがずっと続いていて、現在加速しているのです。

こんな結末は問題解決にはなりません。この結末の背後には国際機関の無為と失敗があります。国際刑事裁判所が、カリム・カーン検察官に見られるように、イスラエル人への有罪判決をしないように、政治的に墮落していますし、国連はガザ状況をジェノサイドとしてありのままに見ないで、地震か平等な国の間の戦争が引き起こした人道的危機としてお茶を濁そうとしています。

しかし、南アフリカがイスラエルを国際司法裁判所に告訴したことに、少し希望の光が見えます。何かよい結果が生まれるかもしれません。裁判所が南アフリカが要求しているような何らかの暫定処置命令を出すことを期待しています。

この暫定措置は変化をもたらす可能性があります。それは軍事行動の停止、封鎖の解除、人道的救済の開始、証拠保全、事実調査団結成などを含んでいるからで、生存者にとって再建の希望をもたらす可能性があるから、重要です。

もちろん、裁判所がそういう暫定措置を命令しても、イスラエルはそれを拒否するでしょう。暫定措置の実行を求めて事案は安全保障理事会へ持ち込まれることになるかもしれません。もちろん米国が拒否権を発動し、イスラエル—米のジェノサイド共犯関係が明らかになるでしょう。

次に国連総会の臨時特別会議が開かれるかもしれません。総会は一国一票の民主的機構ですので、イスラエル非難決議が成立し、加盟国が国際司法裁判所の裁定を実行することを奨励したり、あるいはより具体的な決議で制裁措置を採択することも出来ます。外交や領事館にかんする制裁措置、経済的及び政治的措置などでイスラエルを制裁したり、各種国際機関からの排除したり、イスラエルのパスポートを認めないなどの国際的動きが生まれてくるかもしれません。アパルトヘイト下の南アに対して行われたような国際的圧力をイスラエルにかける国際運動が生まれるかもしれない。また、これは普遍的管轄権に属する犯罪であるため、イスラエル人戦争犯罪者を自国内の裁判所で告訴したり、独自の法廷そのものを設置して裁くこともできるでしょう。

このように国連総会決議に期待できるものはたくさんありますが、英米を筆頭にヨーロッパの国々が反対キャンペーンを行うでしょう。大きな経済力と政治力を利用して各国の代表に圧力をかけ、総会決議が成立しないように、あるいは決議内容を骨抜きにするように動くのは、確実です。

結局、正しいことをする責任は我々市民が担わなければならないと思います。私は、パレスチナ問題にかんしては、国家機構や国際機構への期待と信頼をかなり失っています。官僚機構への信頼喪失に反比例して草の根市民運動への期待と信頼が大きくなっています。大

衆運動としての BDS⁵、アパルトヘイト反対運動、「平和のためのユダヤ人の声」や「イフ・ノット・ナウ」⁶のような市民グループの勇氣ある活動に励まされています。米国では、グランド・セントラル駅や自由の女神像を占拠して政府のイスラエル支援に抗議しています。他の国でもイスラエルのジェノサイドに反対し、イスラエルと手を切れと政府に要求する大規模デモが首都で行われています。デモを禁止している国でも、パレスチナ人を支援するデモを、警官の殴打や逮捕を受けながら、民衆が行っています。

1980年代、南アのアパルトヘイトを支持していた米国政府の態度を変化させ、1990年代初めにアパルトヘイト廃止までに追い込んだのは、そういう草の根運動でした。教会に集まる人々、シナゴグに集まる人々、モスクに集まる人々、市民運動に参加する人々、労働組合の人々が立ち上がることが、大きな変化をもたらすのです。あなたのどうなるのかという質問への答えは、世界の草の根民衆の動きの如何にあります。私の唯一の希望はそこにあります。

クリス・ヘッジズ： イスラエルは、南アの石油欲しさもあって、最後の最後までアパルトヘイト南アを支持していました。各国が南アから離れていったときも、イスラエルは南アに武器を供給していました。

最後にパレスチナ人が絶えてきた長い悪夢の中に、この問題を位置づけたいと思います。1948～49年のナクバで75万人のパレスチナ人が民族浄化されました。シオニスト・テロリストによって数千人のパレスチナ人が殺されました。その後長期にわたって、あなたがおっしゃる「漸進的ジェノサイド」が続き、2023年、ハマスの抵抗を利用して、再びナクバ時代と同じ大規模で早急な民族浄化になりました。そして、規模という点では、このようなことはかつて見たことがないと思います。

これがパレスチナ人にとってどういうことを意味するのか、あなたの意見を聞かせてください。もちろん、民族浄化はガザだけじゃなく西岸地区でも行われています。西岸地区でも300人のパレスチナ人が殺害され、何千人という人々が逮捕されました。ユダヤ人入植者が村や町を襲撃し、パレスチナ人を西岸地区から追い出そうとしています。パレスチナ人の視点から見た状況を教えてください。

クレイグ・モカイバー： それを考える時に重要になるのが南アの例です。パレスチナで起きていることを例外的事象としないで、広い文脈の中で観ることが大切です。つまり、ジェノサイドは連続体だということです。ユダヤ系ポーランド人法学者のラファエル・レムキン (Raphael Lemkin) は「ジェノサイド」という言葉を造語して採用するように活動した人ですが、彼はジェノサイドは一過性の事件ではなく、絶えず続いている連続体だと強調しました。

⁵ Boycott, Divestment, and Sanctions (ボイコット、投資撤収、制裁) 運動。イスラエル企業やそれと何らかの形で結びついている各国の企業のあらゆる商品やサービスをボイコットする運動。

⁶ : アパルトヘイト国イスラエルへの支援に反対するユダヤ系米国人の運動。

私はパレスチナ人ジェノサイドが1947年と1948年のナクバ、つまりパレスチナ・アラブ人が全面的に追い出され、虐殺され、シオニストが奪った町や村を徹底的に破壊して、そこにイスラエルの生活と文化を建設していったナクバに始まったと言いましたが、それでジェノサイドが終わったわけではありません。1950年代にも続き、いわゆるグリーンライン内でも続けました。1967年には西岸地区、ガザ、東エルサレムでも続き、今やガザで集中的に起きています。すべて、同じ民族浄化の一環です。

自民族優越を信じ込む人々が国民の多数派にならない限り、自民族中心主義国家が民主主義国家を装うことは出来ません。だから、不純分子である他民族を浄化するのです。ジェノサイドをするのです。イスラエルはそれを75年間やってきたのです。

現在イスラエルがガザで行っている冷酷残忍な大量虐殺はこれまでパレスチナ人が経験した中でも前例がないほど大規模なもので、1948年のナクバの影を薄くするほどです。

異常なことは、その75年間イスラエルがその犯罪行為を誰からも責められることなく自由に行ってきたという事実です。そして、パレスチナ人をパレスチナの先住民でシオニスト入植者に土地を奪われて追い出された被害者と見ないで、どこからかイスラエルにやって来てユダヤ人を殺害しようとするテロリストと見るイスラエルの言説を、西側大国がそのまま信じ込んでいる事実です。この馬鹿げた言説は米、英、ヨーロッパ主要国の政府の言説になっています。そして、その言説がついに実現しつつあるのです。

しかし、西側でも、民衆レベルになると、パレスチナ人の被害に関する認識が次第に高まり、パレスチナ人の抵抗の正当性を認める傾向が高まっています。たぶん、イスラエルのガザ攻撃があまりにも過剰なので、以前のような漸進的ジェノサイドの黙認ではすまなくなったのでしょう。そして、イスラエル人によるこれまでの大量残虐行為では見られなかったような、説明責任を求める動きが出てくるでしょう。

私は国家機関や国際機関が公式にイスラエルを非難することは期待していませんが、国際司法裁判所の判決や、米国で「憲法上の権利のための法律センター」(CCR)がバイデン政権をイスラエルのジェノサイドの共犯罪で国内裁判所に告訴したことにおいて、それを産み出した世界の民衆運動がパレスチナ人にとって大きな利益をもたらすでしょう。

私は、パレスチナ連帯運動が、将来の変化や、すり切れた偽善的二期解決案を捨て、宗教や民族に関係なくすべての人が平等に暮らせる単一の民主主義的世俗国家をパレスチナの地に建設する一期解決案に目を向ける、最大の希望になるのだと思います。

クリス・ヘッジズ： ガザの現状についてですが、私にはハーン・ユーニスやガザ市に住んでいた家族を持つ友人がいます。その人から聞いたのですが、イスラエルがなにかもをも破壊していますが、特に住民が依存してきた井戸を集中的に爆破しています。つまり、ガザを人間が住めない荒地にしているのです。これはガザのパレスチナ人にとって何を意味するのでしょうか。

クレイグ・モカイバー： そうです。井戸、畑、製パン所、水源など市民生活にとって必要なものをすべて破壊しています。これは、ガザの生活を不可能にするジェノサイド、皆殺し、

全面的破壊作戦を行っている証拠です。それがパレスチナ人に何を意味することになるのかは、これからの展開を待つしかありませんが、ガザは将来長い間人が住めない荒地となるでしょう。それがイスラエルの計画です。

もちろん、時間とお金をかければガザを再び人が住める状態にできますが、イスラエルはパレスチナ人が住むためのガザ再建には全力で反対し妨害するでしょう。イスラエルは、米、英、ヨーロッパの支援で、ガザで行った民族浄化を世界に承認することを求めるでしょう。1948年にパレスチナが民族浄化されてイスラエル国になったことを世界が認めたように、ガザをイスラエル領にすることを世界に求めるでしょう。我々はそれに反対しなければなりません。

パレスチナ人の権利の実現とパレスチナの正義と自由を追求する民衆運動は、反アパルトヘイト運動がかつてそうであったように、今後も続くでしょう。

ガザで命を失った何万人の人々はパレスチナの自由のための殉教者です。彼らの死を無駄死にしてはいけません。私は、イスラエルが中東の真ん中でいつまでも強引に自民族中心主義的事業を続けるために武力を行使しつづけることは、長期的には不可能だと思います。それを防ぐのは世界の人々の平等、正義、自由を求める闘いです。私はそれに希望をつないでいます。

クリス・ヘッジズ： それは素晴らしいことです。長年、国際人権派弁護士として活動し、10月に国連人権高等弁務官事務所の所長を辞任したクレイグ・モカイバーさんにお話を伺ってきました。ありがとうございました。